

先だって知人が出演するコンサートに行った折、出演者の一人のバリトン歌手が「僕が君に伝えたいこと」という歌を歌った。それは1971年に日本でヒットした「別れの朝」(作詞：なかにし礼・歌：ペドロ&カプリシャス)の原曲ということで、原詩の内容と日本語詞の内容は関連がないらしい。そのバリトン歌手が演劇調に歌い上げたせい、私にはところどころ演奏と歌が不仲のように聴こえたので「音に乗らない歌を作った人ってどんな人だろう?」という印象を持って調べてみると、原曲は1967年にヨーロッパでヒットした「夕映えのふたり」という歌で、オーストリアのウド・ユルゲンスという人が歌っていた。ドイツ語の原題はプログラムの通り「僕が君に伝えたいこと」(Was ich dir sagen will)で、本家本元の歌を聴いたら言葉はきちんと音の上に乗っていて「音と言葉が寄り添っている普通の歌だったのね」と安心した。

最近、クラシックの歌手が他分野、特にシャンソン・フランセーズを歌う人が増えている。けれど先の例のように、いくら歌が上手でも、クラシックの発声法は哀愁系のポップスにはそぐわないように思う。だって訴える悲しさではなく内面の悲しさを歌うのだから。そもそもオペラは貴族の歌で、庶民の歌とは違うのだから。「あなた一の燃える手で」と高らかに歌い上げるより「あ～あなたの...燃える手で...」と少し消え入ってもらいたい。音のどこを伸ばすかによって悲しみの度合いが違ってくるのはオペラでも同じことなのだろうけれど、心の外に向かって哀しみを訴えるのではなく、心の中に哀しみがジワジワと広がってほしいと思うのである。ご本家ウド氏の歌は充分哀感があった。「悩んでいるのね」と感情が伝わってきた。もっともクラシックの歌手がポップス調の発声をすれば喉を傷めるだろうから、そこもつらいところである。

さて、この「僕が君に伝えたいこと」の内容を見ると「僕は君への愛を告白したいが言葉が見つからない。だから言葉の代わりにピアノで愛を表現するよ」というものであるが、ここで対比的に思い出されるのが、日本の「もしもピアノが弾けたなら」

(阿久悠作詞・坂田晃一作曲)である。先のドイツ語の歌はピアノが弾けるからピアノで愛を告白できるけれど、後の日本の歌は「ピアノが弾けたなら、この思いを歌にして伝えるのに、僕にはピアノがないし、弾きこなせる腕前もないから伝えることができない」という内容である。状況は正反対であるが、いずれもピアノの表現力に頼っている歌である。ピアノの音色に乗せる歌は紙に書く言葉より雄弁かもしれない。

さて、そこでピアノが弾ける場合。「この曲をあなたに捧げます」と言えるのは作詞・作曲に余程自信のある人だろう。自惚れは論外。「これ何ていう曲?変な曲ねエ～」と言われる程度は序の口「なにこれ!変な歌!嫌な感じ!」と言われたらジ・エンド。ピアノによる告白手段は絶たれたものと思ってほぼ間違いない。「今度の曲は大丈夫だから」という説得は二度目で終わるだろう。三度目はない。

そして今度は腕が良すぎる場合。ピアノの告白度と現実が食い違った場合「愛している度合いが違わない?」と不平を言われるシーンがあるかも。「ムードに騙されたわ。もう一度考え直すわ」と我に返られたときは、少なくとも自分の思いが伝わったことだけで満足して、未来の保証は求めないことが肝要だろう。

腕に自信のあるピアニストの皆様。ピアノで愛を告白する場合、どうか女性に必要以上に美しい錯覚を起こさせませんように。それがお互いのためです。(2012.7.20)